

# 労働と人格—キャリア論の前提として

Labor and a person : A premise for career theories

\*

志村 光太郎

Recent career theories have discussed exclusively the step-up aspect of career progression and ignored the other sides of phenomena, e.g., work and family balance. A person takes various roles such as laborer, dweller, and consumer. These roles constitute one's life: a person develops his/her life experiencing these roles. A person has to face ambivalent roles in work and family life that are often conflicting each other. He or she recognizes that his/her experience is in a part of the world, while his/her escape from the world is in reality. Therefore, it is important to know own value of life prior to stepping out in career.

## 1. はじめに

近年、労働形態の多様化や労働市場の流動化などの進行にともない、キャリア論が隆盛を極めているが、そこでは、職業上のステップアップについては論じられていても、それ以外の側面についてはほとんど論じられていない。

それは近代以降、労働とそれを担う人間の人格というものが分離してしまったかのように論じられてきたからである。あたかも労働においては人格を持たない「マシン」にでもなってしまったかのように。あるいは逆に、その人格というものがすべて労働のなかに取り込まれてしまったかのように論じられてきたからである。「ワーカーホリック」、「企業戦士」、「会社人間」などは、まさにそのなれの果ての姿であろう。また実際に、労働者自身もこれらのことをいわば当然のこととして受け入れ、かつ実践してきたという面もうかがえよう。

当然のことだが、労働を遂行するのは他ならぬ人間であり、その人間はといえば、労働者として仕事に明け暮れるだけでなく、生活者や消費者などとして、家族を養ったり、ショッピングに出かけたり、レジャーを楽しんだり、ボランティア活動を行ったり、等々、さまざまな役割を演じている。それがい

わば人生というものだろう。

もちろん人生は、これらそれぞれの役割が互いに影響を及ぼしたり及ぼされたりしながら展開していく—そしてそれによって、その人間の人格というものが形成されていく、また逆に、その人格がそれぞれの役割のなかに投じられていく—わけだから、労働という側面だけが別個に存在しているということはありません。

だから、あえて生活、消費、等々、人生の他の側面を無視し、労働という側面だけに絞って、キャリア論を展開しても、その有効性には疑問を抱かざるをえないだろう。もちろん、人生において労働は重要な位置を占めているだろうが、どんな人間であってもそれがすべてというわけではあるまい。人間としてその人生をいかに歩むのかというバックボーンなしに、いくら職業上のステップアップについてのハウツーを展開してみたところで、それはいわば歪なキャリア論にしかならないであろう。

とはいえ、そこまで範囲を広げてキャリア論を展開するというのは、非常に困難なことであり、また広げすぎた結果、かえって焦点がぼやけてしまうということもありえよう。本稿においては、こうした弊害を避けるために、この広範囲のキャリア論を展開するにあたっての重要な前提の一つ、つまり労働

論文受理日：2006年10月2日

\* SHIMURA, Kotaro : 青山学院大学総合研究所 (Aoyama gakuin University Research Institute)

と人格のあり様について検討する。

## 2. 役割と人格

### 2.1 引き離された人格

まずは、労働とそれを担う人間の人格というものが分離しているといった状態について検討してみたい。これは、仕事は仕事と割り切って、その仕事において自分の「使用価値」しか認めないあるいは認められないといった状態である。いずれにしても、その仕事において自分の「存在価値」を見出すことはないのである。その人間は、労働においては人格を持たない「マシン」でしかない。これはもちろんフィクションであるが、それでも、近代以降の労働のあり様について考えると、納得させられる部分も多い。実際に、労働者自身もこのことをいわば当然のこととして受け入れ、かつ実践してきたという面もうかがえるからである。

逆に、労働者は労働に人格を介入させることを拒んできたともいえよう。このことは、裏を返せば、人格がそのすべてではないにしても、すでに労働のなかにある程度取り込まれてしまっていることへの抵抗であったり、あるいはこれから取り込まれてしまうことへの不安や恐怖から引き起こされる拒絶反応であったりする。労働者は、単に労働力という「商品」を売り渡しているにすぎず、それを所有する人格までは売り渡していないのだから。

しかし、ともかくそれが意識的であるにせよ無意識的であるにせよ、労働に人格を介入させることを拒んでいることに変わりなからう。人格のすべてが労働のなかに取り込まれてしまえば、もはやその人間はただの「奴隷」にすぎなくなってしまうという意識あるいは無意識が、そこには存在していよう。人格の介入しない労働などあろうはずがない。これはいわば逃避行動の一つとしても受け取れよう。労働に人格を介入させることを拒否しているのだから、その労働者としての自己はさしずめ「にせの自己」ということにでもなるのだろう。

それでは、肝心の人格はどこにいったのかというと、労働者としてその役割を離れた自己—つまりその多くは生活者や消費者などとしてその役割を演じる自己—にこそ宿っているとでもいうの

だろう。それがあたかも「本来の自己」であるともいうかのように。

E・フロムは、上記の文脈とは異なるが、近代人の性格構造における逃避メカニズムとして、「にせの自己」と「本来の自己」の分裂と、前者による後者の支配とを、決定的なものとしてとらえ、次のように述べている。

「本来の自己とは、精神的な諸活動の創造者である自己である。にせの自己は、実際には他人から期待されている役割を代表し、自己の名のもとにそれをおこなう代理人にすぎない。たしかに、ある人間は多くの役割を果し、主観的には、各々の役割においてかれは「かれ」であると確信することができるであろう。しかしじっさいには、かれはこれらすべての役割において他人から期待されていると思っているところのものであり、多くのひとびとにとっては、たとえ大部分のものではないにしても、本来の自己はにせの自己によって、完全におさえられている」<sup>1)</sup>。

こうした逃避メカニズムは、上記のように、労働に人格を介入させることを拒否しているような人間の性格構造についても、ある程度当てはまるだろう。労働者としての自己を「にせの自己」であるかのようにしか受けとめられないような人間に、「本来の自己」などどこにもあろうはずもないからである。そもそも人間は、多かれ少なかれ、他人から期待される役割を演じることなしに、人格的關係を築くことはできない。もちろんその自己が、例えば上司からの命令や雇字掬めの規則にしたがってしか労働できないのであれば、「他人から期待されている役割を代表し、自己の名のもとにそれをおこなう代理人にすぎない」ともいえるかもしれない。

しかし、いくら他律的な労働であろうと、いったんそれを引き受けておいて、後になってから、それを遂行している自己を「にせの自己」であるなどというのは、やはり無責任であろう。

そもそも、労働と人格の分離などフィクションにすぎない。人格の介入しない労働などあろうはずがないからである。それにもかかわらず、労働者は、労働から人格を抜き去った「ふり」をすることにより、つまり労働者としてその役割を演じる自己を「にせの自己」とすることにより、労働者としての

自分自身にアイデンティティをもつことを拒否しているのである。

そうでもしなければ、労働者は、単に労働力だけではなく、それを所有する人格までもを「商品」として売り渡していることを認めてしまうことにもなってしまうからである。近年、労働以外の、生活、消費、等々において、「自分探し」などといって、「本来の自己」を躍起になって探し求める人間が増えているようだが、そうした人間はまさに、労働者としての自分自身にアイデンティティをもつことを拒否しているのである。

## 2.2 取り込まれた人格

それでは、今度は逆に、人格というものがすべて労働のなかに取り込まれてしまっている状態について検討してみたい。これは、仕事はその人間のすべてであって、その仕事においてしか自分の「存在価値」を認めないあるいは認められないといった状態である。「ワーカーホリック」、「企業戦士」、「会社人間」などは、まさにそのなれの果ての姿であろう。

これももちろんフィクションであるが、それでも近代以降の労働のあり様について考えると、やはり納得させられる部分も多い。実際に、労働者自身もこのことをいわば当然のこととして受け入れ、かつ実践してきたという面もうかがえるからである。それほどまでに、労働者は労働のなかにその人格を介人させてきたともいえよう。

とはいえ、このことは、その意識あるいは無意識において、労働に人格を介人させることを拒んでいるよりは「素直」なのかもしれない。現実として、人格がそのすべてではないにしても、すでに労働のなかにある程度取り込まれてしまっている、あるいはこれから取り込まれてしまうのだから、悪足掻きをして無駄であろう。

それでは、その労働と人格との分離を解消し、労働のなかに人格のすべてを介人させれば少なくとも、あたかもそうであるかのように振舞えば、すべてが解決するのだろうか。ことはそう単純ではない。労働のなかに人格を介人させたとしても、その労働において労働者としてその役割しか演じられないのであれば、また新たな問題が生じてしまう。

こうした労働のあり様は、山崎正和氏の言う写実主義と通じるところがあろう。ここで写実主義とは、「文字通り役になりきることを理想とするものであるが」、「言葉通り理解すれば、これは演技のあの両義的な性格を否定することになる」<sup>2)</sup>。つまり、「写実主義においては、役になることはしばしば役であることと同一視され、俳優が作中人物の心理や性格を完全に身につけ、要するに、現実の人生上の変化と同じ変身をすることと混同されてある」<sup>3)</sup>。

その労働において労働者としてその役になりきることが「本来の自己」のすべてであるとしたら、その人間はまさに、H・マルクーゼの言う「一次元的人間」<sup>4)</sup>でしかないだろう。その人間は労働者としての自己にしかアイデンティティを見出せない。「ワーカーホリック」、「企業戦士」、「会社人間」などがその例である。

近年、こうした言葉は死語となりつつあるが、しかしこうした状態はより深刻になりつつあるという面もうかがえよう。

成果主義という名のもと、リストラなどがなし崩し的に行われ、雇用不安が広がるなか、企業で生き残っていくためには、労働者は企業と一体化していかざるをえない。企業が求めるのなら、単に労働力だけではなく、それを所有する人格までもを売り渡す。たとえ「奴隷」となっても、職を失い、格差社会で「負け組」となるよりはマシなのだから。

もちろん、そこからくるストレスは尋常ではなかろう。近年、この種のストレスが急増し、社会問題化していることを見ても、明らかだろう。しかし、そのストレスを克服していかなければ、企業で生き残っていくことはできない。たとえその克服が「一次元的人間」へと向かうものであっても、その方向へと突き進むよりほかはないのである。

## 3. 演技と人格

### 3.1 人格の意味

以上、労働とそれを担う人間の人格というものが分離しているといった状態についてと、逆に、人格というものがすべて労働のなかに取り込まれてしまっているといった状態について検討してきたが、そもそも人格とは一体どのようなものなのだろうか。

それを検討するためにも、まずは人格の意味から辿ってみることにしよう。

日本語の人格は、英語で言えば「パーソン(person)」であり、この「パーソン」は、ラテン語の「ペルソナ(ラ persona)」つまり演劇に用いられる「仮面」から派生した語である<sup>9)</sup>。人間は、多かれ少なかれ、他人から期待される役割を演じる存在であるということからして、人格の語源が演劇に用いられる「仮面」であるというのは、至極納得のゆくところである。「パーソン」という語の第一の意味が仮面であるのは、おそらく、たんなる歴史的偶然ではあるまい<sup>6)</sup>、と R・E・パークが言うのもこのためでもあろう。

それでも、「仮面」はやはり「仮面」でしかなく、「素顔」よりも劣るのだとする傾向があるが、これは間違いである。坂部恵氏も言うように、「仮面が素顔の隠喩であると同様な資格において、素顔は(何らかの<原型>などではなく)仮面の隠喩である」。「素顔は真実に、仮面は<偽り>ないしは<絵空ごと>により近い、と考えるのは、特定の文化的限定を受けた、一つの特殊な偏見以上のものではない<sup>7)</sup>。つまり、素顔が「本来の自己」で、仮面が「にせの自己」であるとうわけではないのである。

パークが言うように、「仮面」がわれわれが自己自身についてつくり上げた概念—すなわちわれわれがその要求に応えようとしている役割—を表しているかぎりでは、この「仮面」はわれわれの「本来の自己」、すなわちわれわれが現実化しようとしている自己、なのである<sup>8)</sup>。だからそもそも、「仮面」か「素顔」かとか、「にせの自己」か「本来の自己」かなどという二者択一的な議論自体がナンセンスなのである。そこでは、「仮面」こそがわれわれの「本来の自己」、あるいは「素顔」なのである。

とはいえ、「仮面」が「素顔」であるとは一体どういうことなのだろうか。これでは、前述した、人格というものがすべて労働のなかに取り込まれてしまっている状態となんら変わらないのではないかという誤解を招きかねない。

この誤解を解くためにも、山崎氏の次の言葉が参考になろう。「役の人物はたしかに劇的世界の内部に生きる存在であるが、しかし、この世界そのもの

がけっして完全に鎖されてはをらず、むしろ好んで、実人生に通じる様式性の浸透を待ちうけてあるもの<sup>9)</sup>である。

確かに、演劇において、役に扮する俳優は、その役に応じた「仮面」を着けてはいるが、しかしその「仮面」はといえば、その役そのものの写実ではなく、その俳優の、労働、生活、消費、等々に及ぶ、「実人生に通じる様式性の浸透を待ちうけてある」。それがいわば、その俳優の「仮面」なのであり、また「素顔」なのである。

だから、山崎氏は次のように言うのだろう。そもそも、「役に扮することは、俳優が役そのものではないからこそ成立するのであり、その事實は、たんに俳優の主観的なところえの問題ではなく、演技の実質的な内容の一部として表現されなければならない」。そこでは、「役に扮する俳優は、一面で、自分が役そのものではないことをかたちにして表はし、つねに疑ひの余地なく、それを観客の眼にたいして明示しておかねばならない<sup>10)</sup>。

例えば、小説「〇〇〇」を演劇にし、上演した場合、その主人公 A を演じる俳優甲は、決して A そのものになりきることはない。かりに A そのものになりきってしまうと、甲はもはやいわゆる俳優ではなくなってしまうだろう。また、多くの観客も、そうしたシーンを期待しているのではなく、固有の人格をもった甲という人間が俳優として主人公 A をいかに演じるのかを期待しているのである。

そのためにも、俳優甲は、主人公 A という役そのものになりきることなく、その人格をその役のなかに反映していくのである。実際、「名優」といわれる俳優は、つねに己の人格を見失うことはない。彼はどのような役を演じようとも、その役を見事に演じきる。が、しかし彼の人格はその役のなかに埋没してしまうことはない。それどころかむしろ、はっきりとその役のなかに反映されるのである。だからこそ、彼が演じるその役は、彼の「仮面」であると同時に、彼の「素顔」でもあるのである。

このことはなにも演劇にかぎったことではなからう。人間は、労働、生活、消費、等々、人生すべての局面において、それぞれの役に扮するいわば「俳優」であり、その意味で、それぞれの局面はいわば「演劇」であるにとらえることができるからである。

そもそも、演劇を行う俳優だって、それで収入を得ているかぎり、労働者であることにかわりないだろう<sup>11)</sup>。

だから、そこからはもはや、労働と人格の分離だとか、あるいはその統合だとかいう議論は生じてこないはずである。労働という局面においても、労働者は、その役そのものになりきることなく、己の人格をその役のなかに反映するからである。だからこそ、彼が演じるその役は、彼の「仮面」であると同時に、彼の「素顔」でもあるのである。

### 3.2 縁起的キャリア形成

坂部氏が言うように、そもそも、「<わたし>あるいは<あなた>という人称代名詞（ペルソナ的代名詞！）は、それ自体としては、（…）、いわばのっぺらぼうの何も描いていない仮面以上のものではない<sup>12)</sup>。というのも、「それが、真に一個の<ペルソナ>としての、<人格>ないし<人柄>としての規定を受け取るためには、何らかの<ひと他者>の面貌を、述語規定として、描き加えられなければならない<sup>13)</sup>からである。「社会なくして人格が人格となることはない<sup>14)</sup>と、和辻哲郎氏が言うのもこのためでもあろう。

坂部氏が言うように、そもそも、その人間が役に扮するといっても、その「<役柄>をして<役柄>たらしめるのは、他のもろもろの役柄との間にとりむすばれる関係のあり方としての<間柄><sup>15)</sup>である。俳優がその役に扮するといっても、演劇というものは通常、その俳優一人で演じられるものではない。多くの俳優たちが共演することによって、はじめて演劇は演劇となるのである。だから、その役は、その俳優一人がいかにも上手に演じようとも、それで成り立つものではなく、他の俳優たちが演じるそれぞれの役との相互作用のなかで、はじめて成り立つものなのである。

以前、筆者は共同で「縁起的キャリア形成」なるものを提唱したが<sup>16)</sup>、ここで縁起とは、仏教の根本理念であり、本来、「あるものに縁ってあるものが起こる」といった意味をもつ。人間は決して一人で生きているのではない。縁起によって生き、生かされているのである。それにもかかわらず、いたずらに個人を強調してしまえば、いきおい人間の相互作用

用という側面を蔑ろにしてしまうことにもなる。このことは昨今のキャリア論においても顕著である。

そもそも、「人間」という文字からして、人は人と人との、つまり自と他との「間」に生きているということがうかがえよう。内沼幸雄氏によれば、自と他は「間」を通して主体性が付託される、という<sup>17)</sup>。R・ステイシーが展開する複雑反応過程という相互作用論<sup>18)</sup>、突きつめて考えれば、自と他との「間」を無視しては成り立ち得ないだろう。

演劇においては、共演者とのいわゆる「呼吸」といったものが重視されるが、この「呼吸」とはつまりここでいう「間」のことである。俳優は、共演者との「呼吸」が合って、はじめてその役に扮することができるのである。労働という局面においても、「阿吽の呼吸」という言葉を耳にすることがあるが、これもつまりはここでいう「間」のことである。労働者の協働においても、「間」は成り立ちうるのである<sup>19)</sup>。

また、内沼氏によれば、「間」の意識は、誇りと謙遜といった念となって現れるという。ただしその際、「自己の主体性を絶対化して我執性のみにとどまれば、自己の誇りは誇るべき根拠を喪失する。その誇りや自負は、同時に他者への謙遜や尊敬の念を通して、自他を超える本来の主体者である「間」が指し示され、その「間」を介して自己に賦与されるのである<sup>20)</sup>。また同じく、「他者の主体性を絶対化して没我性にのみとどまれば、他者が謙遜や尊敬の対象となるべき根拠を失う。そのような根拠は、自己の誇りや自負の念とそのよってくるところが自他を超える本来の主体者である「間」であることによって「間」が指し示され、その「間」を介して他者への謙遜や尊敬へと促されるのである<sup>21)</sup>。

誇りと謙遜の念が存在しえるのは、我執性と没我性との「間」、自己の主体性と他者の主体性との「間」においてである。つまり、そこにおいてはじめて、自他を超える「本来の主体者」である「間」が指し示され、その「間」を介して誇りと謙遜の念が生じてくるのである。

俳優がその演技に対して「こだわり」がもてるのも、そこにこうした誇りと謙遜の念があるからにほかならない。その演技に誇りをもっているからこ

そ、「こだわり」が生まれてくる。また、そこに謙遜がともなっているからこそ、その「こだわり」は行き過ぎたものとならず、常に聞く耳をもった向上心ある演技が遂行できる。そして、そうした演技自体が、また誇りとなり、新たな「こだわり」を生み出してゆく。

もちろんそこでは、俳優は、その役そのものになりきることなく、他の共演者たちとの「間」で、己の人格をその役のなかに反映することができている。だからこそ、彼が演じるその役は、彼の「仮面」であると同時に、彼の「素顔」でもあるのである。

以上のことはもちろん、労働という局面においても同様である。労働者がその労働に対して「こだわり」がもてるのも、そこにこうした誇りと謙遜の念があるからにはかならない。その労働に誇りをもっているからこそ、「こだわり」が生まれてくる。また、そこに謙遜がともなっているからこそ、その「こだわり」は行き過ぎたものとならず、常に聞く耳をもった向上心ある労働が遂行できる。そして、そうした労働自体が、また誇りとなり、新たな「こだわり」を生み出してゆく。

例えば、バイヤーは、そのバイヤーとしての労働に誇りをもっているからこそ、そこに「こだわり」が生まれてくる。また、そこに謙遜がともなっているからこそ、その「こだわり」は行き過ぎたものにはならない。そこでは、バイヤーは、どのような商品を仕入れ、それをどのようにして売れば、顧客は満足して買ってくれるのかということに常に心がけている。その答えを得るためなら、顧客や取引先、あるいは同僚などとも意見を仰ぐこともあるし、また必要とあれば、クレームに対してさえ真摯に耳を傾ける。そして、それが功を奏すれば、そうした労働自体が、また誇りとなり、新たな「こだわり」を生み出してゆくのである。

また、エンジニアは、そのエンジニアとしての労働に誇りをもっているからこそ、そこに「こだわり」が生まれてくる。また、そこに謙遜がともなっているからこそ、その「こだわり」は行き過ぎたものにはならない。そこでは、エンジニアは、どのようなアイデアを出し、それをどのようにして開発していけば、顧客が満足する商品となるのかというこ

とを常に心がけている。そうした商品を開発するためなら、どのような試練にさえ立ち向かう。たとえ失敗しても、それを同僚など他人の責任にしたりはしない。失敗したのは、自分の創意工夫が不十分だったからだ、と、真摯な態度でまた新たな創意工夫を凝らす。そして、それが功を奏すれば、そうした労働自体が、また誇りとなり、新たな「こだわり」を生み出してゆくのである。

そこでは、誇りと謙遜の念に満ちた人格がこうした労働を遂行させてゆく一方で、こうした労働がまたその人格を一段高いものへと形成させてゆく。「こだわり」の労働を通じて得た誇りと謙遜の念が、その人格に宿ってゆくのである。もちろんそこでは、労働者は、その役そのものになりきることなく、他の労働者たちとの「間」で、己の人格をその役のなかに反映することができている。だからこそ、彼が演じるその役は、彼の「仮面」であると同時に、彼の「素顔」でもあるのである。

#### 4. おわりに

役を演じているということは、それがいわば物語のなかにいるということである。J・フリードマン＝G・コムズも言うように、人間は、それぞれの社会的・歴史的・文化的状況につつまれ、それぞれの物語のなかに生きているのである<sup>22)</sup>。山田雄一氏が言うように、「人が自分なりの物語を形成する過程では取捨選択が行われ、この選択がしばしば主流的な権力コードに導かれて進行する結果、かりにそれが自分の選択の偶発性を狭小化するようなものであると、人はそれにとらわれたまま悩み多い日々を送ることになる」<sup>23)</sup>。

労働者は企業の物語とは別にそれぞれの物語を—もちろん両者は無関係ではありえないが—物語らなければならぬ、と山田氏が言うのも<sup>24)</sup>、このためでもあろう。人間は主体として自らの物語を物語るとき健全に生きることができるのである<sup>25)</sup>。

労働者一人一人が、そうしたアイデンティティをもって、他の労働者との「間」で、己の人格をその役のなかに反映する。そこでは、企業の物語が展開していくのと同時に、その物語の世界に半ば入り半ば脱出しながら、その労働者自身の物語も展開して

いく。確かにその労働者自身の物語は小さな物語かもしれない。しかし、それが他の労働者との「間」で連鎖を引き起こすことになれば、それは大きな物語へと発展していくだろう。

### 参考文献

- ・ Cummings, L. and Barry, M. ed (1997) *Research in Organizational Behavior*, Greenwich, Conn., JAI Press Inc..
- ・ 土居健郎(1971)『「甘え」の構造』弘文堂。
- ・ Durkheim, E. (1893) *De la division du travail social*, Paris. Presses universitaires de France (8. ed, 1967).
- ・ Freedman, J. and Combs, G. (1996) *Narrative Therapy*, New York, W. W. Norton & Company.
- ・ Fromm, E. (1941) *Escape from Freedom*, New York, Farrar & Rinehart. (日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社、1965)
- ・ Goffman, E. (1974) *Frame Analysis*, New York, Harper & Row.
- ・ 柗渕友子、松盛千佳、志村光太郎(2005)「縁起的キャリア形成に向けての一考察」『人材育成学会第3回年次大会論文集』、45-50頁。
- ・ Laing, R. D. (1960) *The Divided Self*, London, Tavistock Publications. (阪本健二他訳『ひき裂かれた自己』みすず書房、1971)
- ・ Leonard, D. and Straus, S. (July-August 1997) "Putting Your Company's Whole Brain to Work" *Harvard Business Review* 75(4), pp.111-121.
- ・ Marcuse, H. (1964) *One-Dimensional Man*, Boston, Beacon Press. (生松敬三他訳『一次元的人間—先進産業社会におけるイデオロギーの研究』河出書房新社、1980)
- ・ 中村雄二郎(1984)『述語集』岩波書店。
- ・ Park, R. E. (1950) *Race and Culture*, Glencoe, The Free Press.
- ・ Polanyi, K. (1977) *The Livelihood of Man*, New York, Academic Press, Inc.. (玉野井芳郎他訳『人間の経済』岩波書店、1980)
- ・ Riesman, D. (1961) *The Lonely Crowd*, New Haven, Yale University Press. (加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房、1964)
- ・ 坂部恵(1976)『仮面の解剖学』東京大学出版会。
- ・ Schein, E. H. (1978) *Career Dynamics : Matching Individual and Organizational Needs*, Reading, MA, Addison-Wesley.
- ・ 渋谷望(2003)『魂の労働—ネオリベラリズムの権力論』青土社。
- ・ Stacey, R. (2001) *Complex Responsive Processes in Organizations*, London, Routledge.
- ・ 高橋俊介(2003)『キャリア論—個人のキャリア自律のために会社は何をすべきなのか』東洋経済新報社。
- ・ 玉木欽也(1996)『戦略的生産システム』白桃書房。
- ・ 東條由紀彦(2005)『近代・労働・市民社会』ミネルヴァ書房。
- ・ 内沼幸雄(1997)『対人恐怖の心理—羞恥と日本人』講談社。
- ・ 和辻哲郎(1962)『人格と人類性』『和辻哲郎全集第九巻』岩波書店。
- ・ White, H. and Epston, D. (1990) *Narrative Means to Therapeutic Ends*, New York, W. W. Norton & Company.
- ・ 山田昌弘(2004)『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房。
- ・ 山田雄一(1997)「雇用構造の変化と産業教育の課題」『産業教育研究』第27巻第2号、1-8頁。
- ・ 山田雄一(1999)「組織行動におけるコミュニケーション・メディアとしてのパワー」『明治大学社会科学研究所紀要』第38巻第1号、241-255頁。
- ・ 山崎正和(1983)『演技する身体』中央公論社。



- 1) フロム, E., 日高六郎訳(1965)『自由からの逃走』東京創元社、224頁。
- 2) 山崎正和(1983)『演技する身体』中央公論社、268-269頁。
- 3) 同前、269頁。
- 4) マルクーゼ, H., 生松敬三他訳(1980)『一次元的人間—先進産業社会におけるイデオロギーの研究』河出書房新社。
- 5) 「ペルソナ」は、もともとは演劇に用いられる「仮面」に由来する語であるが、それが転じて、演劇における「登場人物」や、その登場人物が演じる「配役」つまり「役割」を指す語ともなる。そしてついには、今日の英語の「パーソン」に見られるように、演劇を離れて、「人格」そのものを指す語ともなる。

- 6) Park, R. E. (1950) *Race and Culture*, The Free Press, pp.249-250.
- 7) 坂部恵(1976)『仮面の解釈学』東京大学出版会、83頁。
- 8) Park, *ibid.*, pp.249-250.
- 9) 山崎、272頁。ここで様式性とは、「俳優が半ば役の外に立ってあることの自己宣言だ、といへよう」(同前、269頁)。つまり、「様式は明らかに演劇の内と外にまたがる存在であり、俳優の藝と生活上の儀礼や化粧とをつなぐ要素であって、とりもなほさず、演劇と実人生とを漸層的に結ぶ存在だと見ることができる」(同前、272頁)。
- 10) 同前、前掲書、269頁。
- 11) 確かに、通常の労働においては、演劇でいうような観客が常に存在しているわけではない。だから、演劇というよりは、直接観客と向き合わない映画やテレビドラマとのアナロジーで考えた方が分かりやすいかもしれない。
- もちろん、それでも、映画やテレビドラマにおいては最終的にはそれを観る「観客」が存在しているのに対して、通常の労働においてはそのような「観客」が存在しているわけではないと思われるかもしれない。
- しかし近年、CS (Customer Satisfaction) 経営、つまり「顧客満足」の視点に立った経営が隆盛となるなか、どのような労働を遂行しようとも、常に顧客を意識したパフォーマンスをとらざるをえなくなっている。こうした状況を鑑みれば、ここでいう顧客を、映画やテレビドラマでいう「観客」とアナロジーで考えることも可能だろう。
- 社会学におけるドラマツルギー論なども、こうした視点に立ってその論を展開している。
- 12) 坂部、前掲書、86頁。中村雄二郎氏も言うように、そもそも、「仮面＝ペルソナとまったく無関係な真実の顔などというものがあるわけではない」(中村雄二郎(1984)『述語集』岩波書店、40頁)。究極的には、「素顔もまた、一個のペルソナなのだ」(坂部、前掲書、82頁)。但し、その仮面がここでは「のっぺらぼうの何も描いていない」状態であることが問題なのである。
- 13) 同前、86頁。
- 14) 和辻哲郎(1962)『人格と人類性』【和辻哲郎全集第九巻】岩波書店、431頁。
- 15) 坂部、前掲書、79頁。
- 16) 柁淵友子、松盛千佳、志村光太郎(2005)「縁起的キャリア形成に向けての一考察」【人材育成学会 第3回年次大会論文集】。
- 17) 内沼幸雄(1997)『対人恐怖の心理—羞恥と日本人』講談社。
- 18) Stacey, R. (2001) *Complex Responsive Processes in Organizations*, Routledge.
- 19) 確かに、近年、「阿吽の呼吸」という言葉は死語となりつつある。それよりもむしろ、言葉が足りないことによるミス・コミュニケーションといった問題がより深刻になってきている。しかし、こうしたミス・コミュニケーションにおいては、ここでいう「間」は成り立ちえないのである。それが労働にどのような悪影響を及ぼしているかは、言わずもがなであろう。
- 20) 内沼、前掲書、209-210頁。
- 21) 同前。
- 22) Freedman, J. and Combs, G. (1996) *Narrative Therapy*, W. W. Norton & Company.
- 23) 山田雄一(1999)「組織行動におけるコミュニケーション・メディアとしてのパワー」【明治大学社会科学研究所紀要】第38巻第1号、252頁。
- 24) 山田雄一(1997)「雇用構造の変化と産業教育の課題」【産業教育研究】第27巻第2号。
- 25) 同前。